



第3巻第6号

徳島 1916年4月23日

春

ヘルマン・ヘッセ

森の縁では木の芽が露に濡れ、
黄色の花が薄緑の中で輝いている。
鳥たちの恋のさえずりは
明るい林の中で酔ったように揺れている。
子どもたちは桜草を求めて
草原をさまよい、
舌足らずの声で
将来の暮らしのぼんやりとした不安を歌う。

一方われわれ大人たちは
山のかなたの音に耳をすます。

そこでは、遠くの大砲の砲火が光る、
死にゆく人の脈のように弱く、鈍く。

いつか平和が来るだろう。
いつか子どもたちとともに
花輪を持って厳粛な祭事に赴くことだろう。
忘れられぬ墓へと花輪を運び、
死をまぬかれた日焼けした額を見せる
人々の帰還のために花輪を運ぶだろう。
花輪を運ぼう。
さすれば平和が来るだろう
祝祭の鐘の響きの中
いつか -- いつの日にか。
そして、物言わぬ何万もの人の上に
やさしくほほえみながら
奥底からまなざしを向け
永遠の母が身をかがめることだろう。

(『ヴィーラント』誌より)

平和の鳩

クリスマスの時、本紙で紹介した 1915 年秋の帝国首相の演説を読んだ
印象をもとに、クリスマス論説で、いつ和平がもたらされるかを議論する
のは時期尚早であるということを確認せざるを得なかったわけだが、あえ
て今この問題を議論してもよいのではないだろうか。

以前はどこでも、「和平」という語を戦争を行っている国の公的人物は避
けていたのだが、今ふたたび政治家の演説の中に前よりも頻繁にこの語が
聞かれるようになった。

ウィルソン大統領ならびに上院の特別使節が先にヨーロッパを訪問したあと、明らかにされたことでは、これまで相変わらずドイツを敗北させることができると信じ、和平交渉に応じず、意のままに敗戦ドイツと講和したいと主張してきたイギリスがその見解を修正したそうである。

わが国首相の帝国議会での4月演説から分かっているのは、昨年秋の段階ですでに和平交渉に入る用意があると宣言していたのに、イギリス首相アスキスが和平を口にするのを拒んだのである。

帝国首相の演説に対していわば答える形で、最近になってアスキスはイギリス議会で発言したのである。これまでは“crushing Germany”「ドイツをぶつつぶす」としか言ってこなかったのが、今回和平に関しておよそ次のように述べた。「わがイギリスが戦争に突入したのはなぜか、つまり全文明国民に同権を付与するような国際的取り決めの可能性、それを達成したときにのみ和平に応ずるであろう。」これは従来イギリスの政治家の口から発せられてきた言葉、この戦争中大言壮語するのが常であった政治家たちの言葉に比べるとかなりおとなしい。しかしこの言葉はおとなしい感じがするだけではない。思慮深い人間なら誰しも奇妙におもうに違いない。なぜなら、イギリスの政治家の口から、イギリスが「すべての文明国人民」の同権を保護するなどと言うのだから。イギリスは、自分の懐具合の利益にかなうとなると、古い文化を破壊することをいとわなかったのだ。インドを残酷に陵辱したことを思い出すがいい。イギリスはみずからの力を増大できるとなると、どんな手段にも訴えて出た。かつての強大な植民帝国であるスペイン、オランダ、フランスに対する戦争がそうだ。今日所有する領土の大部分はこれらの国のものであったのだ。ボーア戦争はただ一握りのイギリスの金持ちの利益のために行われたものだった。イギリス、この国はある民族全体とその文化を極悪非道にも抑圧するなどということをした、最近の歴史では「アイルランド」がある。このイギリスが突然、全文明国民の同権のために戦っているなどと言う。

アスキスのおしゃべりは困った末の言葉以上の感じがする。ひょっとする

と、譲歩、交渉への先触れと取ってよいかもしれない。

そうすると、アスキスの法王訪問もまた別の印象を与えないだろうか。おそらくイギリス首相が今頃になって表敬訪問するなどということはほとんど考えられない。おまけに法王はアスキスが訪問した直後に、和平を作り出すために改めて努力するつもりであると発表しているのである。

イギリスの上院では戦後の「気がいじみた報復の考え」に反対する重みのある声が上がっている。これまでイギリス国民は常に、戦場で達成できないことはすべて、武器がしまいこまれた後、ドイツのボイコットと経済戦争とによって達成されるであろうと教えられてきた。イギリスとドイツは、戦前たがいに最良の顧客であったのだ。イギリスは経済戦争で苦しむことにもならないだろうか。

もし和平交渉がまだ間近ではないとしても、主要交戦国が秩序ある関係の再構築にもはや全く拒絶の態度を取ることがなくなったという兆候がやっと現れたのだ。

図 書

横浜援助委員会から先週 11 冊の本 — 長編小説と短編小説 — が送られてきた。収容所から利用可能となったものは次のとおり。

A. E. ブラッハフォーゲル	『フリーデマン・バッハ』
クララ・フィービヒ	『生きることのディレクタント』
ヴァルター・ブレーム	『民族対民族』
ヴァルター・ブレーム	『未来を形作る場』
G. フレーメン	『救世主の生涯』
ジュール・ヴェルヌ	『北対南』
A. O. ヴェーバー	『地中の塩』
W. ハウフ	『リヒテンシュタイン』

M. アイト	『職業の悲劇』
W. v. ハイデンシュタム	『エンデュミオン』
W. イェンゼン	『ヘルムスヘーデの遺産相続人』
パウル・グラープアイン	『クレージー・ハンス』
クララ・チュディ	『ルートヴィヒ二世王』
レッシング	『賢者ナータン』
ルートヴィヒ・ガングホーファー	『前線への旅』 (マズリアでの冬期戦)
マルチン・ラング	『灰緑色 (の制服)』
〃	『火の中で』
〃	『わが青き若者たち』
G. H. ベッカー博士	『ドイツとイスラム』
D. ビショッフ	『ドイツ気質』
アントン・フェンドリヒ	『自動車で前線に向かう』
雑誌	『拡大ドイツ』

さらに英語とフランス語の教科書も何冊か、それにそれ以外の教科書も数冊届いた。

目下のところ図書室には、ドイツ語の本が800冊以上、英語の本が約100冊、フランス語の本が少数そろっている。

図書目録は準備中で今週中には完成し、それを何部か皆さんに提供できる見込みである。

ここでわれわれ全体の利益のためにくり返しお願いしておきたいが、たえず製本し直すことを避けるためにこれまで以上に本を大事に扱ってほしい。そうすれば、時間のかかる作業と不必要な出費を避けられるだけではない。需要のもっとも大きな本は長期間利用できないことがしばしば起きているが、それが避けられるのである。

収容所展望

桜の花は終わろうとしている。先週の初めには、その衣装を余すところ無く広げ、老いも若きも、いたるところハナミ（花見）に繰り出していた。もちろん日本人は、花見を桜の花の下で美の鑑賞だけにふけることとは思っていない。花見は、たっぷり酒を飲みながらの陽気な宴と直結しているのである。

日の光と暖かい雨によって、今や葉が一枚も無かった木にも薄緑の芽が生え、麦には穂が出そろい、バラックの後ろの生け垣のカラタチは花をつけ、中庭のクスノキの梢には秋と勘違いさせるほどの若葉の赤い色が輝き、アマガエルがおずおずと最初の合唱を始めている。戸外で日向にいたのはまだまだ快適である。体操選手たちは、好天に恵まれて熱心に練習していて、驚くほどの進歩を見せている。体操していることが邪魔になるとは感じている者は誰もいないようである。というのも練習場所は、体操に関係ない者が散策をする邪魔にならないところにあるからである。これに対し、ボールをガンガン打たれるのはかなりうっとうしい。絶えずボールやラケットに当たる危険があるのだ。収容所の中庭はテニスコートではないし、手足の運動を行う機会は十分にあるだから、ほんの数人の愛好者しかいないボール打ちのスポーツが禁止されても、誰の損失にもならない。

木曜日に、鉄道鉄橋の上流の対岸に社屋のある共同汽船会社が、稲荷祭を催した。稲荷とは一般に田畑の実りの神であり、それ故とりわけ農民から崇拝されているが、商人も時に守り神としている。祭りは歳の市の趣があり、社屋の前には出店が立ち並び、進入路には赤いアーチ門が立てられ、屋上にはおそらく雲を表すシートが置かれ、その上には飛行機が一機浮いていた。一団の漁船が川を上ってきて、祭りに加わっていた。夜の打ち上げ花火、吹き上げ花火などで祭りが締めくくられた。

（カラスの）ヤーコブにとって、起床時間はまだまだ遅すぎるようだ。空が明け染める時間にはもうびょんびょん跳んできて、起床時間前にベッド

から人を追い出し、二階までも上がっていく。彼は愛されてもいるし、怖れられてもいる。というのは人が油断した隙をとらえては、また何かしらいたずらをやらかすのだ。盗みと破壊が大好きなのだ。今は、植えたばかりのものを荒らしたために、庭師と悶着を起こしている。一番いいのは、どこかに閉じ込めてしまうことだろう。

復活祭が目前に迫っている。木曜日に受けた義援金はこの祝祭へのよき序章と見ることができる。この祝祭日にはさまざまな催しが予定されている。第1日目の朝には、大展示会が開催される。画家たちは今も、展示物にふさわしい外観を与える作業の最中である。午後には第1回庭園コンサートが開催される。第2日目には遠足をして、卵探し¹もすることになっている。ミサは、残念ながら行われぬ。しかしシラー牧師が4月28日に訪れることになっている。天気がある程度良ければと、願うばかりである。それに戦争の悪い知らせが届いたなら、復活祭の喜びにそれ以上付け加えるものがないのであるが。こういった意味で、楽しい復活祭を皆さん方に願う。

復活祭コンサート

- | | |
|---------------------|----------|
| 1. 行進曲「ヒンデンプルク万歳」 | ミヒャエル |
| 2. 歌劇『魔弾の射手』幻想曲 | ウェーバー |
| 3. 歌曲「海に寄す」 | シューベルト |
| 4. 喜歌劇『こうもり』メドレー | シュトラウス |
| 5. ワルツ「スケートをする人々」 | ワルトトイフェル |
| 6. 行進曲「万歳、ドイツマイスター」 | エルトル |

天気が良い場合には午後4時半から戸外でコンサートを行う

1 復活祭に行われる慣習のひとつ。庭などに隠しておいた卵を探す。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 105 問の解答

1. D2 - h6 任意の手
2. L か D か T で詰み

第 106 問の解答

1. Dc3 - b2 Lb5 x c7
2. Db2 - b8 任意の手
3. Db8 - e5 (a7, b4) 詰み

第 105 問の解答を Jos. ヴェーバーが送ってくれた。

第 107 問

白 : Kg2, Db1, Sa5, c5, Bb7, e6

黒 : Kb8, Ld8, Sb6, Be7

2 手詰め

第 108 問

白 : Kh2, Dd3, Le7, Se4, f3, Bc4, g4

黒 : Kf4, Ta4, h1, Lc8, e1, Sb7, d7, Ba5, b4, h4, h5

3 手詰め

イタリアの経済的不安 (最終回)

綿紡織の株式会社の半数以上が配当金を支払わず、利益金に対する配分を行った企業の平均配当は 3.81 パーセントであった。絹産業では 6 万台の糸紡ぎ釜に対して、1913 年 11 月末で 10,072 台が稼働せず、5,264 台が時間を短縮して稼働していた。鉄鋼業では生産量を縮小せねばならなかった。ここでも配当金の分配はなかった。貿易は数字面では少しばかり伸びたが、取引相場が下落したことを考慮するとおそらく逆の結果となるだろう

う。経済状況の悪化により、移民がふたたびかなりの増加を見たことは火を見るよりも明らかである。1913 年だけでも 428,484 人の人々が移住したが、これはこれまでで最多の数である。

1914 年の初め頃もイタリアの経済が良くなる兆候は見られなかった。そして世界大戦が始まり、イタリアの弱々しい産業が耐えねばならない最強の耐負荷試験が始まった。これに持ちこたえることはできるのであろうか。イタリアの経済生活はこの危機をどのように乗り越えるのであろうか。これは何人かの洞察あるイタリアの経済通の政治家がすでに現在の段階で自国に投げかけている憂慮に満ちた問いかけなのである。購買力と強力な資本を持つ大国に依存してのみイタリアの経済生活は健全なものとなりえる。困難な時期、ドイツとオーストリアに必要な後ろ盾をもらっていたのである。今日に至るまで、ドイツはイタリアにとって最良の顧客であった。そして最近の数年はイタリアの困窮産業への資金提供者となる傾向をますます強めていた。ドイツ・イタリア間の経済同盟を支持する声もすでに上がりはじめてさえいたのである。それがすべて水に流されてしまった。イタリア政治の狂気の沙汰によってイタリア経済は奈落にけ落とされてしまった。イタリアが決定したことであり、われわれには何の問題もない。根のない木が揺れていた、そして生き残った人はそれが倒れるのを見ることになる。

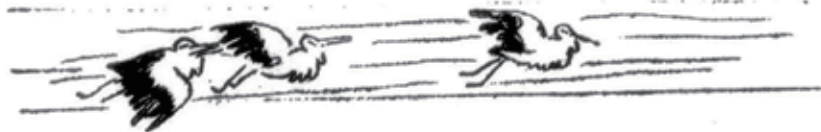


シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』
第3巻第6号
(1916年4月23日)
ユーモア付録



楽しい
復活祭を！



読者のみなさんに

楽しい復活祭を願う。

ここでの最終のものとなりますように。

なんと言ってもそれが一番だから。

故国の兄弟たちには

祭りの贈り物にプロペラを。

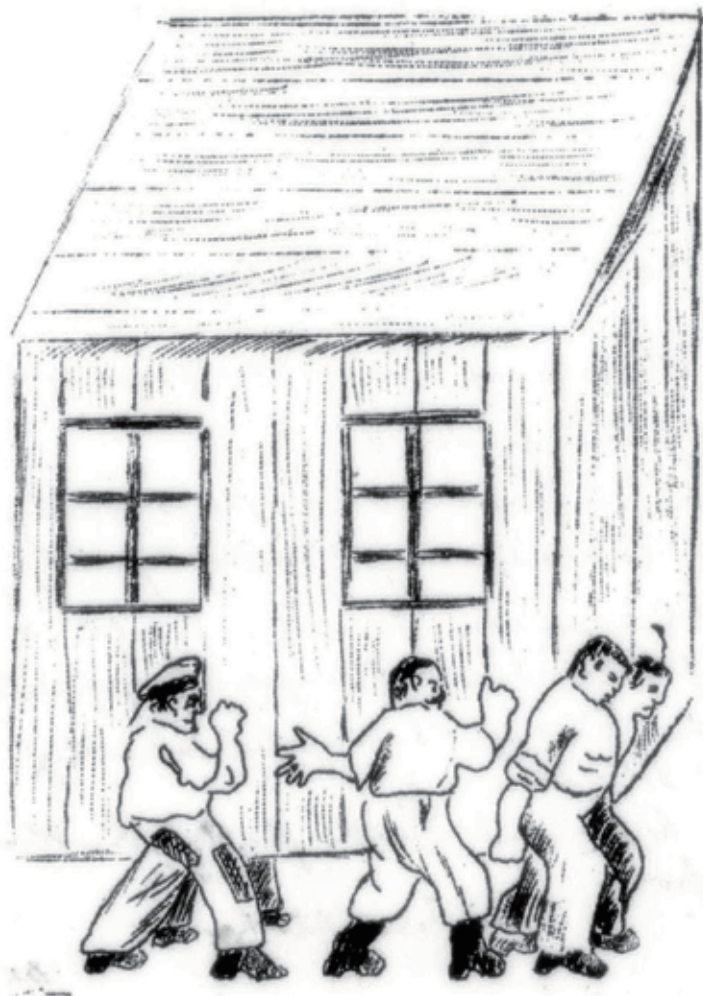
そうすればさらに前進できる

速く、もっとずっと速く。



15日以降

「2週間ごとに引っ越し」





いろいろなこと

移動する首都

ヨーロッパ各国の首都の移転が
いま盛んである。

パリはもうすでに以前、一時的に
ボルドーに移転し、ブリュッセルは
久しくアーヴルにある。そして今、
ベオグラードもナポリに移った。

ペテルスブルクも同じく目の端から
気遣わしげに横目でモスクワを窺っている
もちろんローマとロンドンは
きっとその場から動かないだろうが。

O. K.